



関係人口と協働する【防災・減災】
2025 地域資源利活用プロジェクト

～地域コミュニティに向けたフェーズフリー啓発ワークショップの開発～

実施者
 <教員> 千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 教授 加藤 和彦
 <学生> 千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 加藤研究室 4年 渡邊 楓弥
 <協働パートナー> 【行政】南房総市役所 市民生活部 消防防災課, 市民生活部 市民課 市民協働グループ
 【市民団体等】富浦地域づくり協議会「さざなみ」

1. 背景・目的

災害による被害を最小限に抑えるためには、「事前の備え」が重要であると長らく考えられてきた。しかし近年の調査では、この「備える防災」が必ずしも効果的に機能していない現状が示されている。日本内燃力発電設備協会の調査[1]では、東日本大震災時に非常用自家発電設備が燃料切れや点検不足により稼働しなかった事例が確認されている。また、防災意識調査[2]では、非常食を備蓄していない理由の53.6%が「金銭面」「保管場所」「時間に余裕がない」と回答しており、備蓄に対する負担の大きさが浮き彫りとなっている。このように従来の「備える防災」は、「非常時の未活用」「備える負担」といった課題を抱えており、必ずしも十分な実効性を発揮していない。これらの背景から、日常生活で自然に活用でき、非常時にも役立つ「フェーズフリー」という新しい防災概念が注目されている。

一方で、フェーズフリーの認知度は依然として低く、ある調査では全体の72%がその概念を「知らない」と回答している[3]。フェーズフリーは有効な考え方であるにもかかわらず、新しい概念であるがゆえに理解や普及が進みにくい状況にある。

また、災害時には行政だけではなく地域住民による共助的な助け合いが不可欠であり、阪神・淡路大震災では市民による救助が全体の約8割を占めたと報告されている[4]。しかし総務省の調査では、自治会加入率が平成22年の78.0%から令和3年には71.8%へと低下しており[5]、地域における共助力は弱まりつつある。一方でフェーズフリーは日常時と非常時の地域コミュニティのつながりを維持・向上するきっかけになりうる。

したがって、地域コミュニティ単位でフェーズフリーを普及していくことで、住民の防災意識を高め、日常生活に根ざした共助力を培う効果が期待できる。

そこで、本研究では、新しい防災概念であるフェーズフリーの本質を正しく理解する啓発の手法とした地域コミュニティに向けたワークショップ(WS)の開発を、富浦地区を対象に関係人口(大学生)により実施することを目的とする。

2. 実施内容

- 本研究は、以下のプロセスに沿って実施した。
- (1) 従来の「備える防災」の現状や課題の調査
 - (2) フェーズフリー普及・教育に関する既存の取り組みと課題の調査・分析
 - (3) 地域コミュニティに向けたWSの概念設計
 - (4) WSの開発
 - (5) 開発したWSのテスト運用
 - (6) WSの評価・改善

本研究では、地域住民がフェーズフリーの概念を理解し、日常生活の中で防災を意識できるようにすることを目的として、参加者の主体的な関与を重視した体験的学習を取り入れたワークショップを実施した(図1)。ワークショップは「基礎理解」「アイデア創出」「生活応用」の3部構成(図2)であり、各部で扱う内容を変えながら段階的に学びを深め、日常と非常を結びつけて考える視点を育てることをねらいとした。

第1部では、日常生活における自身の備えをグループ内で共有した上でフェーズフリーの概念を説明し、既有知識との関連づけを促した。第2部では、身の回りのアイテムを題材に「日常でも使えるが、災害時にも役立つアイデア」を考える簡易的な制作ワークを行い、参加者の創造的な視点を引き出した。第3部では、チェックリストを用いて家庭の備えや地域のつながりを振り返り、日常生活に取り入れられる防災行動について検討した。

アンケートの結果、多くの参加者が「フェーズフリーを初めて知った」と回答した一方で、「概念が理解しやすかった」「身近な例を通して日常にある備えに気づけた」といった肯定的な評価が得られた。また、「家族と防災について話すきっかけになった」「身の回りの物の使い方を考え直したい」といった意見もみられ、フェーズフリーの視点が生活に結びついたことが確認された。(図3, 図4) 一方で、「説明量が多く難しく感じた」「アイデア創出の時間が不足した」「地域の災害と結びつけた内容が欲しい」などの課題も明らかとなった。これらの結果を踏まえ、以下の改善を行なった。

- ・ワークショップ内容の分かりやすさ向上
- ・フェーズフリーは抽象的であるため、より具体的な日常例を取り



図1 フェーズフリーワークショップの様子

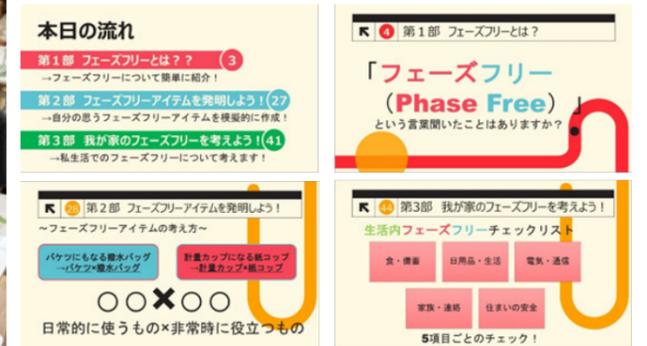


図2 フェーズフリーワークショップの3部構成(スライド抜粋)

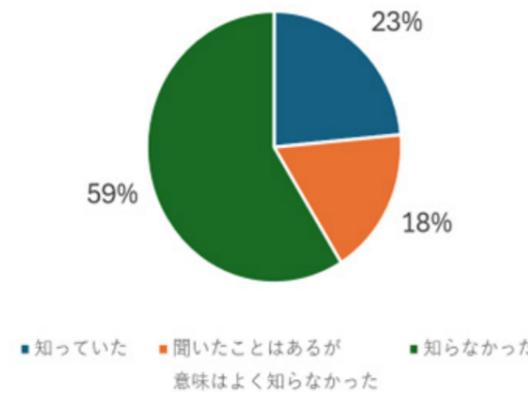


図3 WS実施前のフェーズフリー認知度

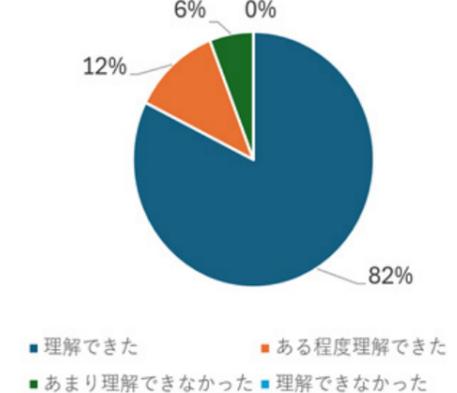


図4 WS実施後のフェーズフリー理解度

域学協働の工夫!

- ★地域内のコミュニティの枠にとらわれないサポーター人材を発掘・育てること
- ★地域内の次世代中核人材が(モチベーションアップや訓練としての)チャレンジできる場を創出すること
- ★マンパワー・活力としての学生が存在すること

入れ、説明を簡潔化する必要がある。また、参加者の既有知識を整理する導入ワークを強化することで、理解の負担を軽減できると考えられる。

- ・創造的活動の充実化
アイデア創出の時間配分を見直し、個人思考とグループ共有のプロセスをより明確に設計する。さらに、日常アイテムの見本を提示するなど、発想を助ける工夫を追加することで、より多様なアイデアが得られることが期待される。
- ・地域特性を踏まえた題材設定
南房総市富浦地域では、津波、台風による暴風、断水、停電などが想定されるため、これらの災害状況をお題として取り入れることで、参加者が自らの生活環境と防災を直接的に結びつけやすくなる。
- ・生活応用フェーズの強化
チェックリストをさらに詳細化し、参加者が「明日からできる行動」を具体的にイメージできるようにする。また、家庭に持ち帰って家族と話し合える補助資料を配布することで、行動意図の定着が促進される。
*参考文献

[1] 日本内燃力発電設備協会:東日本大震災以降の災害発生時における非常用自家発電設備の稼働・被害状況, 広報誌通巻第279号,p23,2025
 [2] ミドリ安全株式会社:2025年度家庭の防災対策実態調査,ミドリ安全.com プレスリリース 2025年3月7日,p2,2025
 [3] アスクル株式会社:フェーズフリーに関する調査 https://www.askul.co.jp/f/special/survey/for_each_job_16/2022
 [4] 消防庁国民保護・防災部・防災課:災害対応能力の維持向上のための地域コミュニティのあり方に関する検討会報告書,p1,2009
 [5] 総務省自治行政局市町村課:自治会等に関する市区町村の取組に関するアンケート,p3,2022